

作文

作文の部 講評

作文の部では、今年も各小・中学校から一二〇〇を超える多くの応募がありました。

小学校低学年の作品では、学校や家庭での何気ない会話の中から喜んだり悲しんだりする純粋な心がよく表れています。そして次第に学年が上がるにつれ、友だちとの関係を大切にしている気持ちが強まり、いじめを無くすにはどうすれば良いのかと行動するようになっていきます。

中学生になると、SNSでのいじめに悩んでいる様子が伺えます。そして広く差別について考えるようになり、LGBTQや戦争、貧困など世界に目を向けた考えを持つようになっていきます。

子どもたちは日常生活の中で喜びや悲しみを多く経験しています。大人たちが想像する以上に差別や不合理に対し、敏感に心が揺らいでいる様子を感じて頂ければと思います。

《特別賞》

ほのぼの賞

「家族」

打出中学校

二年 藤田 怜 亜

すこやか賞

「のぼりぼう」

南郷小学校

三年 川畑 人 時

ふれあい賞

「二年生の記憶」

瀬田北小学校

六年 松田 菜 乃

ときめき賞

「言葉のブレーキ」

長等小学校

六年 片山 凜 子

さわやか賞

「戦争と人権」

堅田中学校

二年 川崎 柚 奈

△以上 特別賞 五点▽

《特選》

「あおとくんととの音楽」

青山小学校 二年 谷 一 真

「電車の中」

南郷小学校 三年 佐久間 和 輝

「自分の心、相手の心」

長等小学校 五年 大角 彩 夏

「私が入権を大切にするために考えたこと」

滋賀大学教育学部附属小学校 五年 穴 山 瑛礼奈

「『好き』を縛らない」

仰木中学校 二年 杉 原 紗和奈

^ 以上 特選 五点 v

《佳作》

「平等」

滋賀大学教育学部附属小学校

五年 布施 和音

「友達と過ごす大切さ」

瀬田北小学校

六年 河津 菜花

「友達との交流の楽しさ」

瀬田北小学校

六年 古屋 凛

「わたしと人権」

堅田中学校

二年 佐倉 結梨

「誹謗中傷と言葉の重さ」

打出中学校

二年 三好 史実

△以上 佳作 五点▽

家族

打出中学校 二年 藤田 怜 亜

家族は私にとって、空気みたいな存在だと思う。あるのは普通で、だけど、なかったら苦しくなってしまう。だから私は、家族を大切に、日々の感謝を伝えられたら、と思うのだ。私の家族は五人で、父は単身赴任で外国で仕事をしている。でも今年度に入ってから「家族」というものを見失いつつあるように感じていた。なぜなら、今までは五人、または父を除く四人で出掛けたりしていたが、姉が大学生・高校生になったこと、私自身部活があったりと、各々の予定が合わず、家族全員がそろわなくなっていたからだ。コミュニケーションの機会が減った分、自分の思いを伝えることも減った。そして、家族間で少し壁ができたように感じた。

でも私はこの経験から、家族が当たり前のようにいることの幸せを感じることができた。コミュニケーションの機会は減っても、「おはよう」や「おかえり」と言ってくれるその一瞬に、幸せの重みを実感した。だから私は、日々の幸せを作ってくれる家族みんなに、感謝の気持ちを伝えることは、何よりも大切だと思う。もちろん、そんな大層な感謝ではなくても、小さな感謝でもいいと思うから、一回、「ありがとう」と言ってみてはどうだろうか。きっとそこには、その家族だけの温かい幸せがうまれるはずだ。

のぼりぼり

南郷小学校 三年 川畑 人 時

二年生のころです。昼休みに遊びに行った時に、のぼりぼりをしていました。それで、友だちは、

「一番上まで上ろう。」

と言いました。けれど、のぼりぼりはあまりとくいではありませんでした。それで、体育の時も練習をしました。すると、すこしだけできるようになりました。けれど、一番上まで上りたかったので、また昼休みに友だちと練習に行っていると、友だちが、上る時のこつなどをたくさん教えてくれました。

「うでに力を入れて、はなしたらすぐつかむんだよ。」

などと言ってくれました。そして、言われたようにやってみると、だんだんとできるようになってきました。そうして、昼休みには、毎日のように練習に行って、上ろうとしてみました。そして、友だちとたくさん練習して、やっと一番上に自分で行けました。できるようになったので、外へ遊びに行くことも多くなりました。友だちと、たくさん練習して、できるようになって、とてもうれしかったです。さいしよは、できなかつたことが、友だちのおかげでできるようになりました。そして、こんどは、こまっている人がいたら、助けたいです。友だちがいてよかつたです。

特別賞 ● ふれあい賞

一年生の記憶

瀬田北小学校 六年 松田 葉乃

私は、一年生の時に体験した六年生になっても覚えていることがある。それは、一年生の時の分団班長にやさしくしてもらったことだ。やさしくしてもらったと言っても、ただ、「大丈夫」と声をかけてくれるだけではなく、登校の時いつも持っていた手さげ袋を持ってくれたりした。

その班長がそうして声をかけたことで、「初めての学校」という緊張が少しほぐれた。いつも分団で友達とあまり話さない班長が、自分に話しかけてくれて物を持つたりしてくれることがとても嬉しかったのを今でも覚えている。

そこまでは、その班長のことを「やさしい人」という印象だったけど、ある日起きた地震の時に「やさしい人」から「かっこいい人」に印象がガラリと変化した。

その地震は、いつも通り分団で登校していた時のこと。分団と合流し学校が見えてきたころとつぜん地面がゆれた。はっと中学校の方をみると中学校の上にある旗がゆれていた。そしてとつぜん起こったことにみんながパニックになっているところに、班長が冷静に

「頭を守って」と指示してくれた。その地震で、物が落ちてきたりすることは無かったと思うが、冷静に判断して下の学年の人に指示を出すことができるのがすごいと思った。

自分も今六年生になって班長をしているが、その班長と自分と同じことができるように、何をすればいいか考えて、分団の時じゃなくても同じような形でできることがないか、周りを見て生活していきたい。



言葉のブレーキ

長等小学校 六年 片山 凜子

私は、自分に自信が持てず、あまり思い通りの発言がしづらいことがある。でも、時々その場の勢いやその時の考えをすぐに発言して、相手を傷つけたり自分が後悔することももある。そんなときによく思うことが一度立ち止まってよく考える、「言葉のブレーキ」だ。言葉のブレーキをかけることができれば、相手も自分もより良い関係になっていくと思う。

私が、言葉のブレーキをかければよかったと思った時は、友だちに呼び出された時。その時は、忙しかったので、つい「ちょっと今は無理。」とぶっきらぼうに言ってしまった。後から、その子を傷つけていないか心配になった。さっきにらみつけられたような気がして、余計に怖くなった。謝ろうとしたけれど、今更遅い気がして、ためらった。でもこのままこんな関係になるのは嫌だったから、謝った。その子は許してくれたけど、もし許してくれてなかったらと思うと、とても怖かった。

他にも、家族などにも言葉のブレーキを意識しておけば、という場面がたくさんあった。

そのようなことを踏まえて、私は言葉のブレーキが大切だと考える。これからは、一度立ち止まって、自分が今何を言おうとしているか、それを言つて友だちがどういう気持ちになるのか、というのをよく考えてから発言していきたい。そうすれば、自分も周りの人達も、より楽しく生活することができると思う。

特別賞 ● さわやか賞

戦争と人権

堅田中学校 二年 川崎 柚奈

人権とは、人が生まれながらに持っている一人ひとりが自由に生きられる権利です。

今では当たり前前に私達の生きるこの世界に存在していますが、一部人権が通用しない場面があると思います。

それは「戦争」です。戦争は人々の自由を奪うので人権など存在しません。

今から約八十年前、日本には戦争がありました。多くの人々が、「お国のため」・「大切な人のため」という一心で、戦場へと消えていきました。

私はこの夏、鹿児島県南九州市にある知覧特攻平和会館を訪れました。そこには、太平洋戦争末期に亡くなられた特攻隊の方々の遺書や遺品が展示されていて、どれも「生きたい」や「死にたくない」などは書かれていませんでした。

しかし、これら全てが特攻隊の方々の本当の思いではありませんでした。心の中では「もう少し生きてみたかった」と願った人もいたそうです。

あらためて私は、自分の本当の気持ちを口に出すことができず、人の自由を奪う「戦争

の残酷さ」を思い知りました。

今、世界には人権が保障されていない人がいます。

アフガニスタンでは、タリバンによる侵攻のせいで、女性の人権が失われ自由に外出が
できず、自由な格好もできなくなっています。

ウクライナもまた、ロシアの侵略により、自由を奪われている人々もいるし、ロシアの人々
もロシア出身というだけで、誹謗や中傷を受けている人々もいます。

私は人権について深くは分かりません。

しかし、この世界を「平等」に「平和」にしていくためには、まず、人権が通用せず、多
くの人々が犠牲になる「戦争」をなくさなければいけないのではないのでしょうか。

今私が過ごしている、自分自身で自由に選択ができる何気ない毎日は、過去の残酷な歴
史があったからこそ生まれた人権の上に生きているのだと知り、あらためて自由の尊さを
感じました。

特選

あおとくんと山の音楽

青山小学校 二年 谷 一 真

ある日のこと、音楽の時間あおとくんといっしょにけんぱんハーモニカで「山のポルカ」をふくことになりました。ぼくは、

「あおとくんといっしょだ。やったー。」
と言いました。

そしてあおとくとれんしゅうにとりくみました。あおとくんはすらすらとふいていました。それにたいしてぼくは、ぜんぜんできませんでした。ぼくは、あおとくんにおこられつつ一生けんめいれんしゅうをしました。もちろんあおとくんに教えてもらいました。そして先生の前でふきました。もう三回目のテストです。きんちょうしました。れんしゅうでやったこと、がんばったこと、おこられたこと、いろんなことを思い出しました。ぼくはがんばりました。ぼくはせいじつぱいやりきました。そしてけっかごうかくしました。よろこびました。だって、あおとくんといっしょにいきを合わせたいろいろなれんしゅうをしたりして、ごうかくできたからです。また一つあおとくと仲よくなれたし、音楽も上手になれたと思います。二つもせいじょうができたんだなと思います。こんどは、ぼくもあおとくんみたいにほかの友だちに教えてあげたいです。

電車の中

南郷小学校 三年 佐久間 和輝

小学二年生のある日、ぼくは、電車にのっていました。

ぼくがのった次の駅で六十さいぐらいのおばあさんがのってきて空いているせきをさがしているようでした。けれど席は空いていなくて、電車がはしりはじめるとおばあさんは仕方なく立つことにしたようでした。そのときぼくは「おばあさん、つらそうだしかわろうかな」と思いました。だけどぼくも重い荷物をもっていて、かわろうかとてもまよいました。その時におばあさんの方を見ると、だいぶつらそうだったのでぼくは、思いきって、

「おばあさん、ぼくのせきにすわりますか？」

と言うと、おばあさんは、

「本当かい？ありがとう。」

と言ってくれました。それを聞いた時ぼくはとてもうれしくなりました。

そのことを帰ったらすぐにお母さんに、

「ぼく、今日電車の中でおばあさんにせきをかわってあげたんだ。」

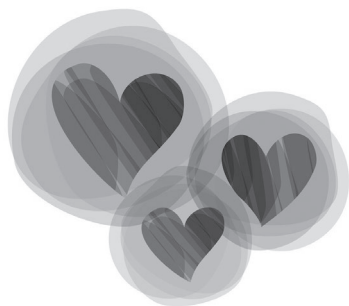
とつたえました。するとお母さんが、

「本当にかわってあげたの？えらかったね。」

と言ってくれてまたとてもうれしくなりました。

それからそのうれしさがわすれられなくてぼくは今でも、おばあさんやおじいさんが電車に乗ってきて、すわるせきがなかったらかわるようになっています。

これからも電車の中だけでなくて、ほかのいろいろな所でいいことをたくさんしていきたいです。



自分の心、相手の心

長等小学校 五年 大角 彩 夏

私がおたがいの人権を守るために大切にしたいことは、自分が大丈夫だと思ったことを相手にしないことです。なぜなら、自分は平気だと思っても相手が本当にそう思っているか分からないからです。

私がそう考えるようになったのは四年生の時です。私は四年生の時、親友とケンカをしました。きっかけは、漢字の読みまちがいをからかわれたことです。その後、親友と色々話していると親友も似たようなことを私にされてガマンしていたと聞きました。でも自分はそんなこととは思ってもいなくて、大丈夫だと思いきみ相手にもしていたことに気づきました。だから最後におたがいがあやまって、ガマンしない、いやな時はしっかり言うと言束しました。このようにみなさんは自分が大丈夫だと思ったことを相手に言っていますか？相手の心は誰にも分かりません。もしかしたらその人は心にすごくダメージをうけているのかもしれない。これから誰かと話すときには、相手のことを考えて、言葉の一つ一つに気を付けたいと思います。

私が入権を大切にするために考えたこと

滋賀大学教育学部附属小学校 五年 穴山 瑛礼奈

私は朝のてつ学対話や人権集会、人権学習などを通して一つ共通しているなと思ったことがあります。

それは、いじめたり、相手を傷つけたりしている人は自分のことしか考えていないということです。自分のことしか考えていないと知らないうちに相手を傷つけてしまっていたり、ちよつとしたことで相手のことを決めつけたりしてしまうことがあると思いました。平等、そして思いやり。よく聞く言葉ですが実際にそのことが完ぺきですかと聞かれると、多分「はい。できています。」と答えられる人は少ないと思います。少なくとも私は「はい。完ぺきです。」とは答えることができません。相手を傷つけてしまうことはもちろん良くありません。しかし、知らないうちに相手を傷つけてしまうこともあります。私はこれは人権の中で一番の大きなかべではないかと思ひます。私はこのことについて五年生の人権旬間で考えてみました。あまりはつきりとした答えはできませんでしたが、私が一つ思ったキーワードは「認める」です。認めると言っても色々あります。相手の意見を認める、成果を認める、

失敗を認めるなどです。私がこの中で一番大切だと思ったのは相手の失敗を認めることです。失敗という言葉はどちらかというとマイナスなイメージがあったり、失敗するとおこられる、からかわれると思うこともあるかもしれません。しかし、私は人権旬間の最後の日の三時間目にあつたエジソンの言葉を思い出しました。

失敗は決してマイナスなことでもおこられることでも、もちろんんからかわれるようなことでもありません。失敗は成功への第一歩です。なので私の思う人権の最大のかべ、知らないうちに相手を傷つけてしまうということは相手の失敗を認めることで少しでも防ぐことができ、失敗は成功への第一歩なので認めることは当然なのだと思います。

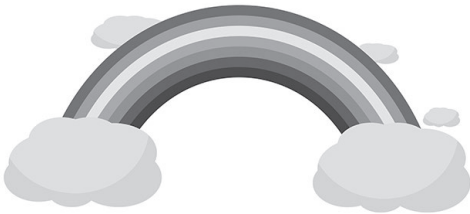
つまり、人権というのはちよつとした思いやりと行動から始まるということです。人権は誰でも持っている権利です。でもなぜ旬間などがあるのでしょうか。それは、いじめがなくならないからです。人権は本当に難しいことです。私は人生最大のかべでもあると思えました。けれども一つ一つ気付きながら一つ一つ学んで、相手の失敗を上げさせるような立派な大人になりたいと思います。

「好き」を縛らない

仰木中学校 二年 杉原 紗和奈

近頃、いろいろなニュースなどで「LGBTQ」という言葉を耳にする機会が増えたと感じる。身体と心の性が違う、同性を好きになる、自分の性が分からない。最近は大分、理解を示す人たちも多くなってきた。しかし、まだ、自分の「好き」を縛られなければならない人も多々いると思う。「LGBTQ」と聞くと少し堅苦しい感じもするが、男性がかわいい物が好きだったり、女性が恐竜や戦隊モノが好きだったりすることは、「LGBTQ」に当てはまらない人でも日常的にあるという認識が広まりつつある。私も実際、幼い頃は女児向けアニメよりも男児向けのものを見ていた上、中学では集団に流されてスカートしか買わなかったものの、小学四〜六年ではズボンばかりはいていた。こういったことは、女性の人も共感することがあるだろう。しかし、男性が女性向けのものを見ていた場合、過度にいじられてしまうことがあると感じる。本人の嫌がることはしてほしくない。そういったことで自分を偽り、自分が好きなことを縛る結果となってしまうならば、過度ないじり、いじめは無くしていくべきだ。

誰にだって「個性」というものがある。何を好きかも、何を嫌いかも、人それぞれだ。それ、「みんなと違うから」という理由で否定する権利は誰にもないはずだ。だから、誰の「好き」も縛らず、みんなが自分の人生をとことん楽しめる世の中になってほしい。私はそう願っている。



詩の部 講評

今年度の詩の部には、昨年度の二倍以上、二一六三編もの応募がありました。

小学校低学年や中学年では、友だちや家族との生活の中で、気持ちのつながりや、自分の心を育むことの大切さについて書かれている作品が多く見られました。

小学校高学年や中学校では、言葉の大切さや、毎日の暮らしに焦点を当て、その当たり前と想っていたことの大切さを見直している作品などがありました。また、反復や比喻など、気持ちを伝えるための表現が豊かな作品も多くありました。

この数年、コロナ禍で今までのようにコミュニケーションを図ることが難しい日々が続いています。今まで当たり前に行っていたふれあいも限られています。だからこそ、その機会を大切にし、その体験から感じたことを、人権という視点から見直し、豊かな言葉にしていってほしいと思います。今後の取り組みに期待したいと思います。

詩

《特別賞》

ほのぼの賞

「ぼくはうれしくて」

滋賀大学教育学部附属小学校

二年 川勝 壮真

すこやか賞

「心の種」

真野小学校

四年 宮本 芽依

ふれあい賞

「そのひとこと」

南郷小学校

五年 婦士 功奏

ときめき賞

「同じなんてない」

瀬田東小学校

五年 川端 依吹

さわやか賞

「あたりまえ」

滋賀大学教育学部附属小学校

六年 竹内 仁乃

△以上 特別賞 五点▽

《特選》

「みんないいところあるよ」

真野北小学校

四年 中川小鈴

「帰り道」

坂本小学校

四年 星野智昭

「友だちって宝物」

青山小学校

四年 松本結美佳

「みんなでつないだバトンパス」

南郷小学校

五年 吉田颯優

「世界の気持ち」

瀬田東小学校

五年 杉本悠真

^ 以上 特選 五点 v

《佳作》

「ニコニコのまほう」

富士見小学校

三年 西本 寧々

「心の天気」

木戸小学校

六年 青木 ほのあ

「幸せ」

和邇小学校

六年 和田 塔子

「お薬」

瀬田東小学校

六年 埴岡 みつき

「色と人」

瀬田北中学校

一年 大伴 絢乃

△以上 佳作 五点▽

特別賞 ● ほのぼの賞

ぼくはうれしくて

滋賀大学教育学部附属小学校 二年 川勝壮真

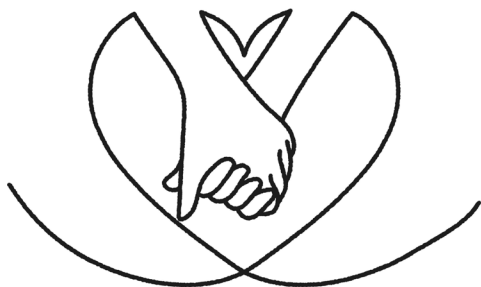
ぼくは、うれしくてたまらない
みんなであそべることが。

ぼくは、うれしくてたまらない
みんなが元気であることが。

ぼくは、うれしくてたまらない
友だちがえがおでいることが。

友じょうは友だちとの

心と心をつなぐかぎ。



特別賞 ● すこやか賞

心の種

真野小学校 四年 宮 本 芽 依

気持ちが良いと心の種が一つ

だけれど心の種をまこう

あいさつすると心の種がまた一つ

そしたら種から芽が出てくるから

家族といると心の種がまた一つ

心の種をふやそうよ

笑顔でいると心の種がまた一つ

心の花をさかそうよ

だけど心が苦しいと

種に芽が出てこない

特別賞 ● ふれあい賞

そのひとこと

そのひとこと で なかなおり

そのひとこと で わらい あえる

そのひとこと で たの しめる

そのひとこと で げんき ずる

そのひとこと で ゆづき ずる

南郷小学校 五年 婦 士 功 奏

そのひとこと で モヤモヤ が きえる

そのひとこと で きそい あい

そのひとこと で かんしゃ する



特別賞 ● ときめき賞

同じなんてない

瀬田東小学校 五年 川 端 依 吹

遅れたって 間違ってたって

歩く速さが違うように

自分の速さで 自分の考え方で

好きなことが違うように

わからなくたって できなくたって

自分の速さで 自分の考え方で

同じなんてないんだから

一人ひとりが違うんだから



特別賞 ● さわやか賞

あたりまえ

滋賀大学教育学部附属小学校 六年 竹内仁乃

あたりまえに

次に何が起こるかは

朝起きて 顔を洗って 制服に着がえる

誰にも分からないから

あたりまえに

だからこそ

ご飯を食べて 学校に行く

今の「あたりまえ」に感謝して

それが私の「あたりまえ」

一生懸命 生きていこう

でもそのあたりまえが

ずっと続くとは限らない

みんなそうとは限らない

特選

みんないいところあるよ

絵がじょうずだね

ありがとう

足が速いね

うれしいな

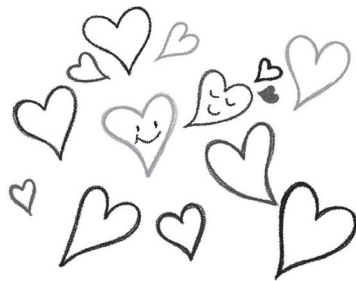
友だち大好き

わたしも大好き

なわとびじょうず

ありがとう

みんないいところあるね



真野北小学校 四年 中川 小鈴

特選

帰り道

坂本小学校 四年 星野智昭

ぼくが帰っている途中

「おかえり」

おばあちゃんが言ってきた

「ただいま」

「おかえり」

思い切って言ってみた

ぜんぜん知らない人だから

心のつりざおはずれたら

むしして通りすぎたので

心がスッキリしたもんで

心のつりざおひっかかる

思わずスキップしちゃったよ

次の日またまた帰り道

おばあちゃんが言ってきた

特選

友だちって宝物

青山小学校 四年 松本 結美佳

うれしいな

友だち「ごめん。」

友だちずっといっしょだから

自分も「ごめん。」

いっしょに遊んだりするのが

二人で「いいよ。」

友だちさ

ほら

いっぱい笑ったりするのも

すぐに仲なおり

友だちさ

友だちっていうのは

すこし悲しい

もめたり遊んだりできる

友だちともめた

そんな友だちが

でも

宝物

すこしたったら

特選

みんなでつないだバトンパス

南郷小学校 五年 吉田 颯 優

バトンをまつ これほどドキドキするとは

みんなが先に入って行って

ぼくは外側でバトンをまつ

タタタタと聞こえると

足はガクガク むねはドクドク

だけど もらわないと

友だちが本気で走って ぼくにわたす

みんなでつないだバトンは

ぼくといっしょにゴールする



特選

世界の気持ち

瀬田東小学校 五年 杉本悠真

助け合いが世界を守る。

心が折れそうになったとき、

話し合うことが心の支え、

とてつもない悲しみにおしやられたときは

話すことでみんなを守るんだ。

相談できる人に話してみよう。

話してみれば相手を知って、

それでああなたの気持ちが晴れるのなら。

気づけば友だちになったんだ。

それでああなたの気持ちが落ちつくのなら。

友だちとなら相談したり遊べたりして

毎日が楽しく過ごせていく。